

メディアスポーツの誕生
～明治後期の大阪毎日新聞のスポーツ事業を中心に～

黒 田 勇

The Birth of Media-Sports in Japan:
Focused on the sports-events of the Osaka Mainichi Shimbun
in the late Meiji era.

Isamu KURODA

Abstract

This essay aims to reveal the process and the characteristics of the early history of media-sport in Japan focusing on some athletic events managed by the Osaka Mainichi Shimbun in the late Meiji Era. The Osaka Mainichi developed the sport-event projects by cooperating with railway companies and was very eager to take the initiative in participating in international sporting events including the Olympic Games.

Keywords: media-sports, long-distance running, Marathon, Olympics, the Osaka Mainichi Newspaper

要 旨

本論文は、明治後期に展開された新聞事業としての長距離走大会の3事例を紹介し、スポーツを新聞事業として確立、発展させていく経過と特徴を明らかにするものである。その際、とりわけ大阪毎日新聞が、鉄道会社と連携することで、郊外にスポーツの空間を確保しつつ、観客として読者を動員していき、さらに、オリンピックを含め国際大会への参加への情熱を高めていくが、その事業運営と報道の特徴を明らかにする。

キーワード：メディアスポーツ、長距離走、マラソン、オリンピック、大阪毎日新聞

はじめに

日本におけるメディアスポーツの源流を探ると、いくつかの流れがある。一つには、相撲への新聞の関与による相撲の近代的発展である。もう一つは学校教育で展開された「長距離徒歩競争」の報道と、その後、新聞社がそれを発展させ大会を主催していくもの。さらに三つ目として、野球の報道と、その後の新聞社による大会や団体の組織化も重要なものである。

これらのなかでも、本稿では、新聞社による長距離競走に焦点を当てながら、20世紀初頭、明治末期のメディアスポーツの誕生と成長の特質を明らかにしたい。

仮説としては次のように考えられる。明治中期に整備された中等教育、高等教育で教育的な実践として内部的に「長距離競走」が行われていた。それらを、いわばエリートたちの「競争的遊戯」に対する好奇心と報道ネタとしての関心から新聞社が取り上げた。これは、スポーツを実践するエリート内部での興味を喚起するばかりでなく、次第に『立身出世』¹⁾の制度的手段としての学校教育への関心と憧れが強まる状況の下で、学校外部の人々の興味も喚起した。これは、スポーツを実践するエリートと、スポーツを見たり読んだりする庶民という二極構造が生みだし、その様相は、「スペクテイタースポーツの誕生」といえるものである。

こうして、新聞はますますスポーツ大会の主催に熱心になっていくことで、新聞社主導のスポーツは、独自の文化領域として独立していく。その中で新聞は発行部数を増加させ、電鉄は郊外にスポーツの空間を用意していく。こうしたメディアスポーツの誕生と成長過程が明治の後期から大正初期にかけて、とりわけ大阪（阪神間）においてダイナミックに展開する。

以上のようなプロセスを明らかにしようというのが本稿の狙いである。

第1章 メディアスポーツの誕生

山口高等学校遠足会

「この時期は相撲報道が大半であり、他のスポーツは競技会の告知や結果にとどまった²⁾」と綿貫が指摘するように、明治中期のスポーツに関する新聞報道の中心は相撲であったが、もう一つの流れが長距離走の報道である。その一つに「山口高校長途競走」の報道がある。この長距離競走は1899（明治32）年2月に官立山口高等学校が実施したもので、日本の近代スポーツ史にも位置付けられている³⁾。この時期には後に述べるように、中等・高等学校

1) 「立身出世」とは、「明治維新以降の近代化の過程で、立身出世の思想は、国民の間に急速に広まった。社会のあらゆる分野で意欲的な人材が求められたため、各界の指導者はこうした思想を助長する政策をとったからである。没落士族の子弟や農村の野心的若者が、大臣、大将、博士をめざして都市に集まり、出世競争を展開した。立身出世は、西洋の個人主義の社会における成功（success）とは異なり、個人の栄達だけでなく、家や村など所属する集団の名をあげることをめざしていた」間（2005）『戦後史大辞典増補新版』922頁

2) 綿貫（2011）

3) 木下（1970）56-57頁、山本（1974）130頁

において、「健脚」「遠足」という名称での長距離競走会が盛んにおこなわれていた。しかし、この山口高等学校の「長途競走」を防長新聞が詳しく報道したことが、長距離競走の「報道の嚆矢」とされることになる。さらに、この「長途競走」は東京の「時事新報⁴⁾」が続いて報道し、ジャパントイムズも後に続いていることも興味深い⁵⁾。

この大会を考察した渡辺一男によれば、山口高等学校の長距離競走は1899年2月11日紀元節を記念して、「運動部陸上遠足会」と称して11マイル（約17km）の距離で実施されたという。ただ、このイベントが一地方のイベントに終わらなかったのは、上記の報道のほか、続いて東京の『中学世界』と『運動界』という雑誌にも掲載されていたことである。

当時創刊されたばかりの『中学世界』は、中等教育が「立身出世」の手段として目標の一つとなった明治中期に、そうした中等教育にあこがれる人たちや実際の中学生たちに大きな影響力をもった教養雑誌であったという⁶⁾。また、1897年7月にスポーツ雑誌の草分けとして創刊された『運動界』も、当時の中等教育、高等教育の世界へのあこがれを象徴するスポーツ大会やその評論を掲載する雑誌であった。以下『中学世界』に掲載された「遠足会」の記事である。

二月に入りて先づ全国運動家の注意を喚起したる出来事は、山口高等学校学生が十一哩半といふ破天荒の長途競走を試みたる事之なり。この未曾有の壮挙は実は同月十五日を以て山口宮市天神間約十一哩半の距離に行はれ、午前九時二十七分三十秒合図委員の号令に由り、幾多の健児は一時に同校運動場西端なる出発線を離れぬ。何がさて十一哩半といふ長程なれば中には途中にて廃止するものもあらんと思ひしに、なかなかさる意気地無しもなく、自転車に乗りたる二人の監督者の間を、韋駄天の如く走り続け、抜きつ抜かれつ、疾駆せしが、遂に十時五十分中村隆祐氏先着第一として、拍手喝采裡に決勝線に入る。続ひて高島、中山、夏秋の面々相前後して到着せり。今一着より十着迄の成績表を掲ぐれば左の如し。

（中略）

当日優勝者の桂冠を獲たる第一着中村隆祐氏の如きは途上、しばしば停足して後方を顧み、或は悠々と逕道を探るなど之が為め少くも七八分を費せりと云へば、氏が実

4) 「時事新報」は福沢諭吉によって1882（明治15）年に創刊された。

5) 渡辺（2017）

6) 三上（2009）

速力は一時間十五分内外なりしならんと思はる。而して競程の途中の鯖山トンネル、勝坂、佐波河等の障害物ありしにも拘はらず、僅々一時間十四五分位の間に到着せる氏が駿足は誠に驚嘆の外なし。之をかの長脚活歩我れに超絶せる外人間の競走レコードに参商するに、毫も遜色なきのみか、優に彼が第一人者と比肩すべきを見るなり⁷⁾。

上記の記事でも、「自転車に乗りたる二人の監督者の間を韋駄天の如く走り続け、抜きつ抜かれつ、疾駆せしが、遂に十時五十分中村隆祐氏先着第一として、拍手喝采裡に決勝線に入る…」というような「血沸き肉躍る」競技の進行の描写は、全国の中学生、あるいは中等・高等教育にあこがれていた人々に、高等教育の世界とそこで生活する学生たちの姿がリアルに伝わり、ますますその世界へのあこがれを増大させたことは想像に難くない。

従来の体育史研究を見ても、明治30年代には多くの中等・高等教育機関で「遠足」「健脚」等の言葉で長距離走が行われていたことが示されている⁸⁾。とりわけ、教員を養成する高等師範学校（後の東京高等師範学校）は1898（明治32）年2月にクラス対抗で「健脚競走」を初めて実施し、その後も「遠足会」という名称で長距離競走を行い、同校の恒例行事として定着していったという⁹⁾。

こうした学校体育の流れの中に山口高等学校の遠足会もあった。しかし、山口高等学校の当事者たちが先の新聞や雑誌に投稿することで、一地方ではなく全国にその存在を知らしめることができたし、また中・高等教育とそこで行われるスポーツ、とりわけ長距離走への関心が生まれつつある中で、その記事は陸上競技、スポーツへの関心をさらに高める働きをしたのである。

不忍池長距離競走

そうした山口高等学校遠足会の報道への直接の反応の例として渡辺が挙げるのは、第一高等学校の反応である。山口高等学校のイベントから3か月後の5月13日に、第一高等学校は、山口高等学校の「遠足会」を明確に意識したうえで、上野・不忍池周囲を13周する長距離走を企てている。そして、このイベントもまた、時事新報をはじめ各地の新聞、雑誌に報道され、第一高等学校のイベントであり、さらに注目を集めることとなった。

7) 『中学世界』1901年1月号（第3巻1号）105頁。

8) 水野他（1994）258頁、木下（1970）56-57頁、山本（1974）124-135頁など参照。

当時の学校スポーツの中心は陸上競技であったが、詳細については山本郁夫『近代陸上競技史（上巻）』（道と書院、1974年）を参照されたい。

9) 山本（1974）126-127頁

そして、おそらく、このイベントが「時事新報」による「不忍池長距離競走大会」に直接つながったと思われる。1901（明治34）年11月に開催されたこの不忍池長距離競走大会について詳細に考察した松浪稔は次のように位置付けている。「この大会は、自社主催によるスポーツイベントを自社紙面を通じて大々的に報道したという意味で、この『長距離競走大会』を日本における最初のメディア・スポーツイベントとして位置づけることが可能¹⁰⁾」だとする。この後、時事新報をはるかに凌駕してスポーツ事業を進める大阪毎日新聞が1901（明治34）年12月、堺大浜で「50マイル徒歩競走」を開催したのは、その一か月後である。「毎日新聞百年史」によれば、「まだ小規模のものであったが、新聞社が自らスポーツ大会を主催したのはこれが最初である¹¹⁾」としたが、時期については「不忍池競走」が一か月早い開催である。

さて、時事新報は次のような開催告知を掲載する。

時事新報が十数年来力を体育の奨励に致したるは世人の兼てより熟知する通りにして、世間の風潮も何時しか時事新報の所見に一致し、今や全国至る処に陸上運動、端艇競漕、各種の運動競技盛に行はるるに至りたるは甚だ喜ぶ可き次第なれども、元來運動競技の効能は単に一時の娯楽に止まる可きものに非ず。其最も重要なる目的は国民全体の体力を健全にし、隨て其精神を活発にして有形無形諸般の事業發達に資すること是れなり。現在各種の運動競技は果たして此目的を達して遺憾なきやと云ふに、競技時間の短き為自ら一時に体力を興奮せしめて目前の勝敗を争ふの一方に偏し易く、耐久力養成に至りては到底これを現在各種の運動競技に期するを得ず。

[…中略…]

時間の競走は以て健脚の実力を發揮するに足らざるが故に殊更らに時間を長くしたるものにして、之を目して健脚の耐久力養成法と云ふも可なり。依て本社は其例に倣ひ広く世間の健脚者を募集して同様の長距離競走を実行せしめんと欲し、先づ大体に於ては西洋の実例を其儘輸入するに決定したれども、我国にては曾て前例なき事なれば慎重の上にも慎重を加へて種々考量の末、競走時間を余りに長くし万万一、競走者の健康を害するが如き事あらんは甚だ面白からずとの考よりして、西洋の実例よりも大に其時間を短縮し競走施行当日の午前六時より午後六時まで全十二時間となし其他

10) 松波（2007）53頁

11) 毎日新聞百年史刊行委員会（1972）546頁。その後の「130年史」（2003）においては、そのような記述はない。

の箇条は左記の通りに定めたり。十二時間の疾行なれば人力車夫の輩などには平日実際に之を行ひつつあるものも少なからず。苟も競走に加はるの勇ある健脚者ならんには毫も健康を存するのは掛念なく其競走に耐ふるならん。今回の試験幸に其功を奏して全国第一等の健脚者を発見し本社の懸賞金を贈与すると共に、時事新報紙上に其勝利を博したる顛末を表彰して我国の運動競技方法に耐久力比較の一生面を開くを得ば本社の本懐とする所なり¹²⁾。 (「時事新報」1901年10月1日)

開催目的は、「国民全体の体力を健全にし随て其精神を活発にして有形無形諸般の事業発達に資する」ことであるが、現在の各種の運動競技は、「一時に体力を興奮せしめて目前の勝敗を争ふの一方に偏し易く耐久力養成」はできない。したがって、「耐久力の養成」のために「長距離競走」を開催するというものである。

時事新報は、この大会の開催企画連載の途中に、茨城県の水戸中学の学内の長距離走にも賞金を出して報道している¹³⁾。このことから、この不忍池畔の大会が一高の大会から急にヒントを得たものではなく、当時の「長距離競走ブーム」の中の企画でもあったことが窺われる。

そして、これまでのスポーツ報道とは全く異なるのは、大会開催までに応募者100余名の中から体格検査において15人の選手を選抜し、連日選手の練習風景や談話記事を掲載し、当日の競技の様子の挿絵を入れ、詳細に記事として大会の盛り上げを試みたことである。

例えば、この選手たちのなかには木下東作がいた。木下東作は一高の競争にも出場し優勝していたが、この時には医科大学生となっており、その学歴の希少性からもこの大会の注目の一人であり、大会前の練習時の談話が掲載されている。このことから分かるように、先の一高の大会があつてこそ、この大会であつた。木下東作は、新聞社にとって読者の注目を集める「個人化」の象徴的な存在であり、新聞が作り出す「スター選手」のさきがけといえるものでもあつただろう。残念ながら木下は途中棄権しているが、その後大阪医専教授を経て毎日新聞に入り、メディアにかかわりつつスポーツを先導していく、その象徴的人物となっていく。

ただ、練習談話については彼だけを取り上げたわけではなく、他の郵便配達人や人力車

12) 当時の新聞記事は、句読点を付けない文体が一般的であつたが、本稿においては、以下で引用する記事すべてについて、意味を読み取りやすくするために、筆者が句読点を追加している。ただし、この大会の一連の記事については、松浪稔(2007)の先行研究があるため、松浪の表記を使用する。

13) 「時事新報」1899(明治34)年11月7日

夫の練習談話も取り上げ、大会の盛り上げを図っている。先の告知記事にも、「人力車夫の輩などには平日実際に之を行ひつつあるものも少なからず」などとあるように、彼ら「職業人」を排除するよりはむしろ歓迎している。この点では、のちに述べるように「職業人」を排除するアマチュアリズムや、「エリート学生＝選手」と「観衆」との分離によるスポーツ事業という意識はまだ生まれていない段階であった。結局、優勝者は茨城県の人力車夫、安藤初太郎であったが、当初の目標である12時間で70マイルを走破することはできなかった。時事新報はその成果について社説で次のように主張している。

今度本社にて催したる十二時間の長距離競争の結果は既に紙上に詳報したる如くにして其成績が予定の七十哩に達せざりしは聊か遺憾なりしかども、当日の盛況は申す迄もなく世間一般の人気は一方ならずして、或は早くも第二回の競争を申込みのあるが如き。此計画が幾分か体育奨励の目的を達したるの効あるは我輩の満足する所なり。[…中略…] 其成績が少しく予期の哩数に達せざりしは遺憾なるに似たけれども、是れは自から種々の事情を存したるが為にして一概に日本人の体力が西洋人に及ばざるの証拠なりと速了す可らず。 (「時事新報」1901年11月13日)

このように、想定した記録が出ず、大会が競技面で大きい成果を得たとは言いが、論説では、「幾分か体育奨励の目的を達したる」と自賛した総括を行っている。もちろん、この大会が当時どれほどの「体育奨励」の影響力を持ったかどうかは不明だが、「萬朝報」が大会直後に大会と主催の時事新報を批判し¹⁴⁾、また次に述べる大阪毎日新聞の反応を見れば、同業の新聞社を刺激したことは確かであったろう。ちなみに、記事では「第二回の競走を申込みのあるが如き」とあるが、第二回は開催されることなく終わった。

第2章 大阪毎日新聞の南海鉄道の連携

堺大浜の長距離競走大会

「不忍池」の大会に遅れてわずか一月後の12月15日に、大阪では大阪毎日新聞が堺大浜でいわゆる「50マイル徒歩競走」（紙面では「長距離競走大会」）を開催する¹⁵⁾。この大会開

14) 「萬朝報」1901年11月10日付（松浪（2007））

15) この大会をはじめ、後述する大阪毎日新聞主催の3つの長距離走イベントについては棚田真輔・青木積之介『阪神健脚大競走』（1988年）に詳細な記載があるが、本書は、当時の大阪毎日新聞の記事の転載がほとんどであり、

催の社告を11月26日に掲載しているが、時事新報社の「長距離競走」に遅れた悔しさがにじみ出た社告となっている。

東京の時事新報は本月九日不忍池畔において十二時間七十哩以上の長距離健脚競走會を催はしたり。然るに廣言を吐いてその募りに應じたる十餘名の競争者中一人としてその實を顕はしたるものなく、世人をして東京人の柔弱爲すなきを笑はしめたり。我關西には素よりこれ位の脚力を有するもの多々なるべきは我社の信じて疑はざるところなるをもつて、今回同社の聲に倣ひ來る十二月十五日（雨天順延）をもつて同社の健脚會¹⁶を堺大濱舊臺場跡に開き、大に關西強健の男士^{ねがう}冀くは來りて我社の試に應じ平生の所養を發揮せられよ。（「大阪毎日新聞」1901年11月26日）

このように、時事新報主催の大会は期待通りの成績を収めなかったことを伝え、「東京人に比べ、関西の方がより優秀だと信じている」などと言いつつ、時事新報の企画を皮肉っている。この社告は、大会の20日前に出されているが、大会の規模等を考えると、準備はそれ以前数か月前からなされていたものと思われる。したがって、準備の途中に「時事新報」に先を越されたこととなり、その悔しさが上記のような皮肉に満ちた社告となったのであろうが、大阪毎日新聞は、陸軍や大阪の病院と連携しつつ、事前審査で医学的な「身体検査」も実施するなど、長距離競走を科学的に把握しつつ読者の注目を集める工夫をしていた。

さらに、直前の記事においても、単に大会そのものと出場選手の情報だけでなく、「応援」「観客」を意識した記事を掲載することで読者を巻き込むことも考えていた。例えば大会前日の下記の記事もその一つで「不忍池」と比較しながら、ファン（蟲眞の人々）の行動を取り上げ、「人気の旺盛」なことを強調している。

お百度詣り

時事新報社不忍池畔に催せし長距離競争の當日、上野大籠館の下女は其抱車夫の必勝を守らせ給へと同地の辨天にお百度を踏みしとして云う談ありしが、今度我社の催には關西人士の意氣込實に天を衝くの有様にて時事新報の時に比するべきにあらず。

また出典が明確でないものも多く、大会の概要を理解するには役立つが、本章での参照・引用には用いなかった。

16) この社告では「健脚會」という語が使われているが、その後は「長距離競走會」とされている。

必ず予定以上の里数を踏破する關東男子の膽を破りたきものと思はぬものもなく、分けて鬮頂の人々中には平常は迷信とて排斥するお神籤を取り、お百度を踏む等余所目には笑止なことをなして喜悲する位なれば亦以て人氣の旺盛なるをトすべきなり

（「大阪毎日新聞」1901年12月14日）

ここでも、先に触れた西洋諸国の身体を意識したというよりも、むしろ新聞事業としての東西競争を意識した位置づけが強調された報道をしている。「130年史」においても、「関西ナショナリズムと賞金の相乗効果で、大会事務局には翌日から出場申し込みが殺到、その数は締め切りまでに653人にのぼった¹⁷⁾」と、その娯楽性への訴えを強調している。

大会の報道内容についても、この大会と「不忍池」とでは大会の特徴が異なっている。一つには、先にも触れたように、競技そのものの報道ばかりでなく、周辺の様子を「雑感」として掲載し、イベント全体の社会的なインパクトを報道したことである。もちろん、時事新報でも「競走場外の光景」といった見出しで観客の動向などに触れてはいたが、堺大浜のイベントについては、その競技と競技者だけでなく、それを見守る観客やその他イベントの全体像を報道する姿勢が明確になったことである。これについては、『130年史』にも、「大毎はこのイベントでスポーツ報道初の本記と雑感の書き分けを行い、兎耳子が達者な筆で雑感（「長距離競走評判記」）をまとめ、本記だけではうかがい知ることのできない選手と観衆の表情にスポットをあてた」としている。「雑感」の例として、

▼荒木梅松は「手頃の棒に風呂敷包をくくりたるをかたげて、セツセツと駆る」。見物はそれを見て「郵便屋さん、しっかり行きなはれ！。荷物が重かったら預けときんかい」

▼吉岡は「時々機を見て疾風の如く駈け出す」。見物は「思わずワツとトキの声を上げ『エライゾ、エライゾ、アンマリ駈けて草臥れちゃ駄目だぜ』と心配する。とたんに吉岡はピタリッと急調を止めて相変らずスタスタの足拍子に」戻る。見物一同「ナールほど巧いものだなあ」

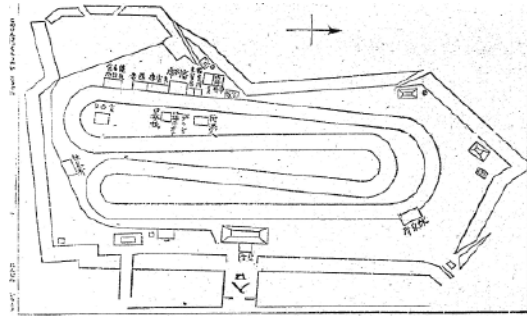
といった記事を挙げる。そして、「『大毎』に社会部と名のつく日本最初の部が誕生したのはこの年の2月。その社会部の『兎の耳』を持つ記者がとらえた明治の観客の姿は、底抜けに明るくおおらか」だったと回顧している¹⁸⁾。

17) 毎日新聞社130年史刊行委員会（2003）、417頁

18) 毎日新聞社一三〇年史刊行委員会（2002）421頁。筆名「兎耳子」とは「のちの童話作家久留島武彦と思われる」同前417頁

このように、主催者自らが、競技そのものの魅力だけではなく見物人の賑わい等イベント全体の盛況を演出し、伝えていくというスポーツイベント事業の定型をこの大会で生み出したといえるだろう。

さて、この大会は堺の大浜台場跡地を利用し、図1のような一周約0.5マイルのコースを設定、午前8時にスタートし、午後4時までに50マイル以上を走破することを予想した8時間のタイムレースであった。当日、最終的に20人が選抜されて走り、最終的には、112周56マイルを走破した村瀬百蔵が金時計と賞金50円を獲得した。そして、20人中5人が目標の100周50マイル以上を走破している。ちなみに、村瀬百蔵は26歳で岡山県で桶屋を営み、先の「不忍池長距離走」の優勝者と同様に人力車夫もしていた。



堺大浜の長距離競争場

図1 「大阪毎日新聞」1901年12月14日

南海鉄道との連携

二つの大会のもう一つの相違点は、一つ目と関連しているが、鉄道との連携である。前日には、南海鉄道¹⁹⁾と関西鉄道が当日の往復割引切符を販売するという記事と両鉄道の広告(図2)を掲載し、大会翌々日の17日の記事では、以下のように観客を運んだ南海鉄道と難波駅の盛況ぶりが描かれている。

長距離競走會當實は殊に天氣晴快にして観覧者に取りては尤も好適の日和たれば朝來出掛たるもの夥しく、難波驛に於ては午前十時頃より乗客順次詰掛け、二ヶ所に臨時出札所を設け絶へず切符を發売せしと、此度新案せし切符収容箱を出札者が肩に掛け驛前廣場にて立売をなさしめたる等治ねく切符の發売に努め、一方各列車は二十輛若くは十八輛の連結となし遺憾なく是が輸送を了せしも、午後一時頃より三時迄の間に於ける乗客の群衆は一層甚敷切符立売者のみにても約三千餘枚の切符を發売せり。

19) 「南海鉄道」は現在の南海電車であるが、1885年設立の「阪堺鉄道」の経営譲渡を1898年に受け、この大会を迎えているが、まだ電化されていない。その後も、他の関西の私鉄同様に、様々な合併や経営権の移動が繰り返され、1947年に現在の「南海電鉄」が設立されている。詳しくは、南海電気鉄道株式会社編(1985)を参照のこと。

午後競走會終了數萬の乗客午後四時頃より一時に堺驛に寄駆け來り、同驛に於ても豫て期したる事なれば充分其用意をなし置きたると保護の爲め出張ありし警官の注意行居たるとに依り、さすがに停車場の内外に山なす乗客は頗る規律正しく數行の列をなし、改札口より吾妻橋際迄の長蛇形を形造りしかば、同社にては豫て計畫し居りたる堺難波間十五分毎に十一回の列車を運轉せしめ、各列車共満載し漸く六時三十分發列車迄にて無事輸送し盡せり。斯つ雑沓を窮めしにも不拘、列車は總て定時運轉をなし輸送等些の支障を見ざりし。尚當日乗降人院吸收入金は左の如しと。 乗降人員 三萬四千二百〇七人、收入金 四千〇三圓六十二錢

（「大阪毎日新聞」1901年12月17日）

大坂日新新聞 大坂毎日新聞 付外走競離距長 引割賃車瀛

(延順天雨)日五十月二十

難波、天王寺、堺	一等 金四拾錢	二等 金三拾錢	三等 金二拾錢
梅田、桃山、山田	一等 金二拾錢	二等 金一拾五錢	三等 金一拾錢
梅田、天満、橋ノ宮	一等 金二拾錢	二等 金一拾五錢	三等 金一拾錢
京橋、玉造	一等 金二拾錢	二等 金一拾五錢	三等 金一拾錢
梅田、山田、各驛	一等 金二拾錢	二等 金一拾五錢	三等 金一拾錢
關西線内	一等 金二拾錢	二等 金一拾五錢	三等 金一拾錢

道鐵西關 道鐵海南

図2 「大阪毎日新聞」
1901年12月15日

以上のように、堺難波間を15分ごとに11回にわたりピストン輸送して観客をさばき、かつ定時運轉ができたとイベントの成功を南海鉄道とともに誇っている。

そして「長距離競走大会」の記事は12月19日まで続く。しかし皮肉にも12月18日に、大会期間中に選手や関係者が宿泊していた大阪市内中の島の「大阪倶楽部ホテル」が火事で焼失し、19日付では一段目に「長距離競走余談」、二段目に「大阪倶楽部の焼失」との記事が掲載され、ホテル焼失記事の続報に紙面を奪われたのか、20日以降の「社会面」には「長距離競走」の続報はなくなっている。

時事新報は、「長距離走」の後続事業としていくつかのスポーツ大会を企画したが、継続的な開催には至らなかった。一方、大阪毎日新聞はスポーツにかかわるイベントを立て続けに開催していく。大阪毎日の社史から抜粋すれば、1905（明治38）年8月には海上10マイル長距離競泳（大阪築港～御影魚崎間）を開催、この競泳は水泳熱を促進して学校その他に優秀選手をつくる機運をつくり、翌1906年、浜寺と阪神打出海岸に海水浴場を開設、海泳練習所を設けている。1908年には全国中学校庭球大会を浜寺で主催、中学校レベルでのスポーツの全国大会として最初のものとなった。そして翌1909年3月、神戸東遊園地—大阪・西成大橋間で日本最初のマラソン大会を主催した。

これらの大会や事業は、すべて鉄道との連携によって「郊外」で開催されたものである。

1901年12月の堺大浜でのイベントは南海鉄道などがあってこそ開催できた。そして、1905年8月の海上10マイル長距離競泳も、同年5月の阪神電鉄²⁰⁾の開業を受けて開催されたものである。さらに、次項で述べる日本初の「阪神マラソン」も阪神電鉄がなければ開催は難しかった。この大会の反響の大きさが、ますます電鉄との連携を深めてのスポーツイベントの開催を模索するようになる。

第3章 日本におけるマラソンの誕生

大阪毎日新聞によるオリンピックの「発見」

2019年、NHK大河ドラマ『いだてん』でマラソンが取り上げられることで、20世紀初頭の陸上競技の状況が一般にも知られることとなったが、日本において「オリンピック」なり「マラソン」なりがいつ頃知られるようになったのか。木村毅の回顧によれば、「第一回のアテネ・オリンピックを報じた『少年世界』（明治二十九年）に『競走はマラソンよりこの円戯場まで四十キロメートルの間を走るなり』とあって、この名前は早く伝わっているのだが、しかし日本で行う長距離競走に『マラソン』の名を冠するというハイカラな知恵はなかなか出なかった²¹⁾」とする。先に取り上げた『少年世界』には西洋世界の文物が取り上げられていたが、1896年には、「オリンピック」が紹介されていたことになる。

そして、新聞でマラソンやオリンピックが初めてとりあげられたのは1908年のロンドンオリンピックである。東京日日新聞が「倫敦路透電報」として大会期間中にロンドンからの記事を掲載している。

オリンピック競技（廿六日着）オリンピック競技會第一の呼物マラトン競走は其距離ウインズル城より競技場に至る二十六哩にして競走者は五十七名なりき。第一着は伊太利人ドランドなりしが疲勞のため他の援助を受けて競技場に入りたりと理由に據り第二着の米人ヘース一等賞を得たり。以下の入賞者はヘツフエロン（南阿）フォーアショウ（米國）の二人なり。御臨場の皇后陛下の思召によりドランドに對し特殊の賞杯を下賜せらるゝこととなりたり。（『東京日日新聞』1908（明治41）年7月27日）

20) 「阪神電鉄」は1905年5月に大阪神戸間を結んで開業した、日本最初のいわゆる「都市間私鉄」である。

21) 木村（1978）156頁

以上のように、「オリンピック競技会」とは何かという解説もない記事であり、マラソンはともかく、オリンピックについて読者にどれだけの認知を得たのかは不明である。そして、大会から一か月半後に新聞を通してオリンピックの概要を最初に知ったのは、当時大阪毎日新聞の通信部長、相嶋勘次郎による次の記事だとされている²²⁾。

七月二十四日（金曜日）有名なるウキンヅル宮殿の前方より英佛同盟博覧會場内なるスタヂアムに至る間に催されたる二十六哩四分の一の長距離徒歩競走は英、米、佛、獨、伊、露、澳、加奈陀、和蘭、瑞典、丁抹、希臘、南阿弗利加、濠洲、ボヘミヤ、白耳義等白人種十六ヶ國の選手五十七人の勇敢なる精神と訓練ある体力の如何に強健なるものなるやを十二分に發揮したる近世運動會の花であつて斯る種類の出来事としては實に特筆大書すべきものゝ一である。倫敦の諸大新聞が此十數日間满腔の熱心を傾倒して書き立てたのも無理ならぬ次第で、タイムス紙上に此勝敗の結果に関する論説を見たのも決して偶然ではないのである。

此二十六哩競走に先だち博覧會場内には大運動場を築造せられ、去十三日よりオリンピック、ゲームの催しがあつて各國の選手雲の如く集り、或は競走、或は水泳、或は幅飛び、或は高飛び、障碍物競走と凡そ個人の運動（ボート、ベースボール等團体的のものゝ外）は何から何まで毎日盛んに行はれて居たのである。これ勿論世界的のもので、これに依て世界に於ける運動のレコードは極まるのである。尤も世界大運動會の催されたのは今回が五回目博覧會其他の催しがあつて世界各人種の集り來る便宜のある時に特に催すものなることは前前回は米のセントルイに於て開かれたるにて明かであるが、今度は運動を励まし、体育を奨め勇敢なる精神の養成を奨励せらるゝ思召しを以て英國皇帝親しく御臨場盛んに開會の式を擧げさせられたので、倫敦に於ては近來自分は運動論者で世間の非難にも何にも御構ひなくドシドシ運動を奨励する一人であるから、是非此光景を見て置きたいと思つて十七日であつたが博覧會に行つた序でに入場して見ると、入場料が一志から一志六片、二志六片、五志、七志と云ふ様な譯で上等の棧敷は日本の三圓五十錢も取られるのだから、運動會の見物料としては決して廉ではないのである。然るに六萬の席、否後に記する二十六哩競走の日には

22) なお、1901年開催の堺大浜の「長距離競走大会」の記事中に「オリンピアの猛者共は…」(「大阪毎日新聞」1901年12月16日)という言葉が登場するが、記者が「古代オリンピアの祭典」をイメージしていたのか、この5年前に始まった「近代オリンピック」をイメージしていたのかは不明である。また、どちらにしろ、読者のほとんどが、それが何を意味するかは理解できなかったかもしれない。また、7年後の東京日日新聞の記事でも、「オリンピア競技大会」『オリンピック競技会』と、用語は統一されていない。

優に十萬の人を入場せしめたと云ふ宏大なる運動場に四五萬の人が詰め掛けて居たのには聊か肝を奪はれたのである。運動場は回向院や、南地の大相撲場所の完全にして、且つ大なるものと思へば善いのであるが、一方に千二百メートルや八百メートル競走などを遣つて居る其サークルの中に又種々の運動も続行されて居るので水泳の池なども此圏内にあるのだが、此圏内がいはいば相撲の土俵であるのだから其大は想像し得らるゝであらう。倅此相撲の土俵に見立てつべき大運動場は六十萬圓を費して建築したもので、三十六萬四千餘方尺の面積を保ち鉄骨の棧敷で囲はれてあるので、棧敷は下方から段々になつて腰掛が並んで居ると矢張相撲の棧敷と同様だから一番外側の、そして一番上な棧敷から見たならば運動場は見えなくて中段頃の婦人の帽子が見えるであらう。
〔大阪毎日新聞〕1908（明治41）年9月7日

少々長い引用となったが、大阪毎日新聞のこの記事は、5回にわたってマラソンとオリンピックの魅力を伝える特集記事の一回目の記事である。この記事は、当時英国に滞在中であった相嶋がロンドン大会の2か月後に「マラソン競争」と題して書いたものであり、記事の中心はマラソンを紹介することであった。上記の記事では、オリンピックを「世界大運動会」と表現し、ロンドン大会の概要や会場の様子を説明しているが、スタジアムを相撲場に例えているのは当時の日本のスポーツ状況を反映しているだろう。ちなみに、この記事の中で第四回のロンドン大会を「五回目」と記し、1904年のセントルイスを「前々回」としているのは、1906年にオリンピックの「中間大会」がアテネで開催されているからで、現在のIOCの記録からは正式の大会ではないとして削除されているものである²³⁾。

この記事の後の4回の連載で、マラソン発祥の歴史やレース当日の経過を詳しく解説、さらに観客の熱狂ぶりや死闘のゴールの様子などを伝え、そのうえで、このオリンピックへの日本の参加について連載の最後に訴えている。

歐米人の中には日露戦争に於ける日本の強行軍の記事等を見て千二百メートルか八百メートルでは足の長い西洋人が勝つだらうから二十哩以上となれば日本人が勝つてあらうと信ずるものがある位である、然るに今度躰の小さい伊太利人が勝つたのでますますそんなことを云ふ人が多くなった、兎に角世界第一等國の伍伴に列せんとするには軍艦の數ばかりではいかぬ此の次には日本も彼の運動同盟に加はり選手を送る様に

23) ボイコフ (2018) 59-65頁

したいものである。 （「大阪毎日新聞」1908（明治41）年9月12日）

上記の記事のように、当時の国際社会における日本の認知度を考えれば、「そんなことを云ふ人が多くなった」という部分は相嶋の創作、あるいは彼の気持ちの表現であったと思われる。さて、これらの記事が、翌年開催される「阪神マラソン」を想定した記事であるのか、それとも、この記事によって企画が始まったのか、そもそも相嶋が派遣されたのは、その準備を兼ねてのものだったのかは確認できない。ただ、相嶋は大阪毎日の海外派遣員の第一号として欧米を視察中であり、マラソン以外の競技について関心がなかったのかは不明であるが、この一連の記事はほぼマラソン競技の経過に終始し、半年後に日本初の「マラソン大会」を大阪毎日新聞が開催することになる。

さらに、この記事がその後のオリンピック参加への動機づけになったかどうかも明確ではないが²⁴⁾、国際社会への進出、西洋との競争と、持久力の鍛錬、スポーツのスペクタクル性、こうした当時個別に展開されていたものが「マラソン」という語に収斂して、具体的なオリンピックというイベントが「目標」として可視化された時期であったと言えよう。

マラソン大競走（阪神間二十哩長距離競走）の開催意義

大毎が主催した二つの長距離走、先述した大阪毎日新聞社の長距離競走大会（1901年）と「阪神マラソン」（1909年）の大会報道から、20世紀初頭の日本の帝国主義的政策が新聞事業に反映していたと論じる研究もある²⁵⁾。具体的には、日露戦争前後より、野球や長距離競走が国際交流を進め、国際スポーツ界へ日本が進出する端緒を開いたが、それらを主催した新聞は、自ら主催するマラソン大会の意義に当時の帝国主義的政策を反映させているというものだ。確かに、「阪神マラソン」開催の社告（図3）においても、国家の国際的な競争とスポーツを結び付け、マラソン開催への注目を煽っている。

マラソン競争たる列國各その代表選手を開催地に出して交々之を舉行し國際的大競争としてその一勝一敗は世界の耳目を聳動すると共にマラソンの一語青年者をして渾身の血を踊らしめつ、あり、（中略）

吾帝國民の勇武や絶倫、聲名既に宇内を厭するものありと雖も恨むらくは未だ嘗て

24) ロンドン大会を視察した日本人は、相嶋のほか、少なくとも弁護士の岸清一と東京高等師範の永井道明である。浜田（2018）21頁

25) 野口邦子（2004）

図3 「マラソン大競争」社告（「大阪毎日新聞」1909年2月19日）

欺かる國際の大遊技に一人の代表者を出したることなきを（中略）今回勇者を抜く全國に抜きて神戸大阪間廿哩長距離大競走を行ひ以て日本におけるマラソン競争の端を開きそのレコードを中外に表示すると共に聽て開かるべき次回のマラソン國際の大競走に日本選手を出すべき準備たらしめんと欲す。（「大阪毎日新聞」1909年2月19日）

文面上は確かに、「吾帝國民の勇武や絶倫…」といった語句が躍り、日清、日露戦争を経て、「西洋列強」と日本を比較する言説が増大した時代を反映したのではあるだろう。一連の長距離競走大会は、もちろん偶然にこの時期に集中したわけではない。

確かに、渡邊や松波が指摘するように、この時期、西洋人の体力にキャッチアップすることが意識された時代である。近代化／西洋化の初期段階で社会制度の西洋化のために多くの近代的テクノロジーと制度を輸入した日本であるが、19世紀末、明治後期には國民の身体の劣悪さが可視化されてきた時代であった。その象徴ともいえるのが「義和団の乱」への西洋列強とともに干渉した際の日本兵の身体であったであろう。（図4）

國民の身体にかかわる政策、とりわけ学校体育においては、森有礼の兵式体操にはじまり、強兵を作るという大前提があった。ただ、その中でも、様々な教育思想の流入から、身体の陶冶についての議論は教育学のレベルで盛んにおこなわれていた。ところが、日清、



図4 義和団の乱への各国派遣兵

日露戦争を経た日本における体操をめぐる議論は、「体操科の目標の中に、単に身体の発達だけでなく、愛国心の要請とか、軍事的任務の遂行とかを取り上げ、体操科の国家・国民的意義を強調したことは、自由主義的な明治初年の体操観が国家主義的な体操観へ発展したことを意味する」²⁶⁾ というように、国家的な政策としても「強い身体」の育成が当然のように求められ、「宣明」されていく時期だったのである。

このような時代に、新聞社主催のスポーツイベントについて、当時の国際情勢を意識して、新聞が国民に「身体の強靱化」を訴える側面ももちろんあったのであろう。しかし、もう一面では、その訴えは読者や潜在的読者の娯楽の関心に訴えるものでもあった。新たな競技について、国家的なイデオロギーを喧伝しつつ、読者の関心をひきつけたのは、やはり「娯楽」としてであった。というのも、この大会から後かけて、国民に向けての体育を奨励する記事、あるいは国家的政策としての体育政策の必要を訴えたり、その議論を喚起しようとしたりする記事は掲載されていない。

したがってこうした言説は、新聞が当時の「帝国主義的政策」を意図的にスポーツ奨励を通して国民レベルで実現しようとしたものだと直ちに言い難い。こうしたスポーツイベントの開催は、国民を体育、スポーツへ駆り立て、国民の体位、体力を向上させていく実践につなげるというよりも、一部のエリートの「競争」を庶民が楽しむことへの関心を高めているようにも解釈できるからである。まだ、スポーツ事業の在り方（ビジネスモデル）が確立していなかった時代に、審判等での陸軍の協力は社会的な信頼を得るものであっただろうし、むしろ大阪毎日新聞がスポーツ事業推進のために、「帝国主義的」な社会の風潮に乗り、その言説を利用したという方が適切であろう。その結果として、国民の間に「帝国主義」的考え方がより普及していったことは事実であろうが。

さらに言えば、中等教育、高等教育内部の体育、さらにそこでの娯楽としての「競走」競技を報道する段階から、次の段階へ、つまり新聞社自らがその「競走」を見世物（スペクタクル）として企画開催していく段階に入ったのが、この世紀をまたぐ時期だったと言えるだろう。

スター選手の創出

2月19日の社告以来、開催日まで一か月以上にわたり、毎日大会関係の連載記事を掲載しているが、そこには国民の体位の向上についての「啓蒙」記事、あるいは帝国主義的国

26) 今村（1970）445頁

家観に基づき体育奨励といった「扇動」的記事はほとんどなく、連日大会へ向けて「観客」としての読者の関心を高める記事を掲載し続けている。

何よりも、優勝者には300円の賞金のほか、下位の入賞者まで豪華な賞品が提供され、「今回のマラソン競走舉行後二箇年以内に歐米においてマラソン國際的競走ありたる場合吾社競走に第一位を占めたる者にしてこれを出場せんとする時は吾社は旅費として金壹千圓を支給すべし但しその本人は一通り英語を解するものならざるべからず」と社告で宣言したように、國際大会、あるいはオリンピックへの派遣も考えて、大会の盛り上げが図られていた。このことは、「マラソン競走申込者に告ぐ」との社告に示された参加条件を見ても分かる。

吾社がマラソン大競走の計畫を發表するや其壯舉は天下を驚かし、爾來各地より競走加入の申込頻々として既に數十名の多數に達したるが、元來吾社の計畫たる青年者の体育を奨励して健全なる國民を作るの礎をなし、併せて將來歐米に開かるべきマラソン國際的大遊技に出場し得べき日本選手を養成せんとするの目的に出づるを以て、競走申込者に對して吾社は豫め左の希望を有するものなり

一、今回の競走は如上の意味を有する者なるが故に、競走選手たる人は相當の學歴を有する人若くは學生又は軍人等を希望す

一、吾社は今回の壯舉において平常學窓にある青年および煩雜なる事務に鞅掌しつ、ある人士の体力養成を鼓吹せんとを欲するものなるが故に、常に其職業に於て脚力をしようしつつある人々は其申込を猶豫されんとを切望す

（「大阪毎日新聞」1909年2月22日）

結果として、全国から多くの学生が応募することになり、その中には、三年後のオリンピックに初めて派遣される東京帝大の三島弥彦や、同じく春日弘（のちの陸連会長）も含まれていた。彼らは写真入りで紹介され、帝大生アスリートがスターであったことをうかがわせる。

さらに、本大会の一週間前の3月13日には中の島公会堂で応募者の「体格試験」を行い、これも詳細に報道し、また翌14日には鳴尾競馬場で「予選会」を開催するが、当日の予告記事においても「斯くのごとき大規模の大競走は我が国運動界未曾有の大出来事」と表現し、予選出場選手128名の名簿を掲載し、また観覧も無料として来場を呼び掛けている。

さらに、エリート学生たちの「スター性」がイベントには求められたが、とりわけ華族

出身で東京帝国大生の三島の落選については、大会当日、彼を弁護する記事を掲載するほどであった。

三島選手 茲に本日本競走を舉行するに際し記事の最後において特記し置きたきは、東京大學の選手三嶋彌彦氏の落選に就いてなり。同氏は東京の運動界における大選手として關東一の名譽を博し、未だ嘗てランニングに敗れたることなかりしを以て無論本社のマラソン豫選競走には入選すること我も人も期待せし處なるに、意外にも僅々一着の差を以て落選したるは氏の名譽のために本社は多大の同情を惜まさんと共に、氏の敗因に就いてその名譽のため記し置きたきは、氏が東京を發したるは去る十二日にして十三日着阪すると同時に長途旅行の疲勞を休むる暇もなく体格検査場に臨み、一回も練習をなさずして翌十四日直ちに競争を試みたるを以て終に眞の技倆を發揮する能はざりしは本社の深く遺憾とする處なり。（「大阪毎日新聞」1909年2月21日）

三島弥彦は短距離を得意とする選手であり、長距離走に東京から進んで参加したかどうかは不明であるが、その予選落ちをここまで記事にするのは、主催者の大阪毎日としては、三島を明らかに「客寄せ」のスターとして扱っていたからに他ならない。先の木下東作が、時事新報によって注目された日本初の新聞によって生み出された「スター選手」だとすれば、三島は、すでにこの時東京では有名選手となっていたが、木下に次ぐ第二世代のスター選手だと言えるだろう。

さらに、今大会の参加条件については、エリート学生、スター学生を集めたかったというばかりでなく、この時期にすでに決定されていたオリンピックの「アマチュア規定」が表示されていたものである。と同時に、堺の長距離走から8年を経て学校スポーツの発展もあり、主催者側では人力車夫などの「職業人」を排除しても、新聞事業としてのスポーツイベントが成立すると判断したとも考えられるだろう。

競技経過

さて、この連日の特集記事と広告欄で大会当日までの盛り上げを図り、大会当日、そして翌日には大会の模様を大々的に伝えている。当日の新聞には、全16面のうち、図5のような一社全面広告を含め、3面にわたって大会に協賛する各商店の広告が掲載され、さらに3面を使って大会の詳細が書かれている。これほどに大阪毎日新聞にとっての一大イベントであったことがこの紙面構成からもうかがわれる。

当日は、予選を通過した20人が走り、コース沿いには多くの観客が詰めかけたことが報道されている。結局、日本初のマラソンの優勝者は金子長之助であり、賞金300円が贈られている。レース後、盛大な祝賀会が開催され、翌日には、またその模様が詳しく報道されている。「二箇年以内に歐米においてマラソン國際的競走ありたる場合」「これを出場せんとする時は吾社は旅費として金壹千圓を支給すべし」とのことであったが、三年後の1912年のアムステルダム大会への金子長之助の出場はかなわなかった。ちなみに、金子は27歳で岡山県の在郷軍人会所属で日露戦争に出征した後、農業を営んでいた。この大会の出場選手は決勝進出者20人のうち学校関係者が半数を占めたが、優勝者はまたも学生以外から出る結果となった。

このイベントから23年後の『新聞五十年』では、レース後の模様についての膨大な記事群を次のように要約して記録している。

競走終了後、各選手は本社旗で装はれた市電に乗り審判員および本社員らこれに加はり、梅田を發して樂隊入りで市内を行進したので、全市マラソン氣分にひたり百万の子女は沿道に集まり選手の万歳を叫んだ、その夕本山社長は中之島ホテルに審判員、選手、本社員らを招いて盛んな祝宴を開いた、本社では直ちにロンドンの大新聞社に打電したので、忽ち世界に傳へられ、わが運動会の名譽を歐米人の間に輝かしめるとともに、本社の聲價を中外に發揚したのである²⁷⁾。

大会翌日の紙面構成や上記の要約からも、主催者として「阪神マラソン」が事業として大成功であったことが伺われる。さらに、関係者以外の記憶としても、先の木村毅が少年時代のこのマラソンを記憶している。当日、街に出てみると「いたるところにマラソン競争のポスターがはられ」、「みんなが興奮していた」と当時を回顧している²⁸⁾。



図5 当日の全面広告（「大阪毎日新聞」1909年2月21日）

27) 大阪毎日新聞社編（1932）197頁

28) 木村（1978）156頁

さらに、先述の「新聞五十年」では、このマラソンまでのいくつかの事業について、以下のように回顧し、評価している。

新聞紙は多数の民衆を相手とするもので、各階級の實情に通じ、民衆の心理をつかむのが最も必要なことである。そしてこの種の計畫により新聞紙と民衆とが親しく接近するの機会を興へられたので、民衆の動きを察し、各階級の實情を知り、その表裏を察することを得たので、時代の流れが記者の頭に働いて、民衆の實生活にピッタリと合ふ新聞紙を作り、民衆生活の精神的糧としての新聞の使命を果すことを得たのである²⁹⁾。

大阪毎日新聞の成功は、以上のようなスポーツイベントを開催し、「民衆の心理」をつかみ、「民衆の実生活にピッタリと」あう新聞紙を作ることで成し遂げられたと総括しているが、その一方で、1932年刊行の年史ではあるが、これらのイベント群が国家的な「富国強兵」や身体強健な人材を育成したという総括はなされていない。

鉄道と映像

さて、この阪神マラソンは、堺大浜の長距離競走と大阪御影間の遠泳との経験を基礎としながら、大阪毎日新聞のスポーツ事業として、さらに新たな段階に入ったことになる。ひとつは、会場が鉄道を必要とする郊外の空間にあるのではなく、実際の鉄道の沿線においてスポーツを展開したことである。都市間輸送電鉄として開業した阪神電鉄の沿線を走り抜けるものとして見事に企画されている。そして、紙面においても沿線各所を写真入りで紹介し、当日の現場での観戦を誘っている。

さらに、阪神電鉄側も積極的な協力態勢を敷き、電車を増発するばかりでなく自ら予選会を開催し、阪神電鉄の選手として送り込むほどの力の入れようであった³⁰⁾。

また、大阪毎日新聞の報道においても観客の動向に多くの紙面を割いている。その観客は読者であり、また次のイベントの観客でもある。そして、その動向は常に鉄道とセットで報道されることとなる。選手や関係者、そして観客の移動に阪神電鉄が利用され、さらに、その勝利者のために「花電車」も用意されている。この電鉄との明確なタイアップは、

29) 大阪毎日新聞社編（1932）、197-198頁

30) 「大阪毎日新聞」1909年3月4日付

3年後の1912（明治45）年に開催される日本初の「クロスカントリー」大会で、新たに箕面有馬電軌（現阪急電車）との連携としてさらに活かされることとなる。これについては別稿に譲りたい。

ここで、この初マラソンの意義を本稿の視点に即してまとめておけば、この明治末期より、鉄道がスポーツを可能とするスペースを確保し、あるいは整備し人々を運ぶ、そして新聞がそのスポーツ大会を組織し、人々に知らせていくという関係が明確に誕生したのである。さらに、シヴェルプシュの『鉄道旅行の歴史』³¹⁾を援用すれば、阪神電車の開通と「阪神マラソン」の開催、そして新聞による報道³²⁾と、実際に人々が観客として阪神間を移動することによって、「阪神間」という空間とそこでの生活時間が「想像」できるようになっていくのである。

これは別稿³³⁾で考察したように、こうしたイベントの開催によって、阪神間という生活空間やその間にある「郊外」という概念がさらにリアルなものとして認識されるようになっていく。そうした観点からは、新聞社は電鉄会社の郊外戦略に対して、スポーツイベントの開催を通して早い時期から貢献していたともいえるだろう。

さらに付言すれば、日本初の国際マラソンとして開催された上記の阪神マラソンは、ロンドンオリンピックでマラソンの映像を見た相嶋の体験を参考にして、大毎から依頼を受けた横田商会（「日活」の前身）が自動車で撮影し、23日と25日に大阪の第二電気館と広島市の寿座で上映された³⁴⁾。武村民郎が「現代のニュース映画のルーツとなった³⁵⁾」とするように、この時期にすでに活動写真によるスポーツジャーナリズムが意識されていたとも言える。映像メディアとスポーツの親和性もこの大会で確認されたという点でも、このマラソン大会はメディアスポーツの画期となるものであったと言えるだろう。

おわりに

本稿では、新聞社が主催した明治後期の3つの長距離走に焦点を当てた。一つ目は1901（明治34）年の時事新報主催の「不忍池長距離競走」、二つ目が同年の大阪毎日新聞による「堺大浜長距離走」、三つ目が1908（明治42）年の同じく大毎主催の「阪神マラソン」であ

31) シヴェルプシュ（2011）

32) 主催した大阪毎日新聞だけではなく、神戸又新日報や大阪朝日新聞も報道している。

33) 黒田（2019）

34) 大阪毎日新聞社編（1932）197頁、毎日新聞社一三〇年史刊行委員会（2002）443頁

35) 武村（2015）258頁

る。

スポーツ史の観点からは、徐々に長距離競走の競技形式が整備され、また長距離走が中等学校以上で普及していく過程、そして日本における学校体育、スポーツが世界の競技会へと進出していく基礎を築いた時期として位置づけられてきた。一方、新聞事業史の観点から見ると、長距離走がメディアスポーツとして発見されていく過程であった。それは、ルールの策定と報道の工夫、そして読者と観客の組織化の過程でもあった。さらに、鉄道史の視点から見れば、郊外にスポーツのスペースを提供することでスポーツ観戦の乗客の存在に気付き、それによって健康な余暇活動の最適地として「郊外」を発見していく過程であった。

さらに、本稿の文脈に従ってより端的に要約すれば、明治末期、あるいは20世紀初頭という時期は、学校スポーツ、メディア（新聞）、鉄道という三者が協力、連携することで、次第にその親和性に気づき、新たなスポーツ文化としてのスポーツイベントを発展させていく時期だったと言えるだろう。

【参考・引用論文、文献】

- 今村嘉雄『日本体育史』不昧堂出版、1970年
大国寿吉『スポーツ生活半世紀』1948年
大阪時事新報社編『第六回極東選手権競技大会記念写真帖』十字館、1923年
大阪毎日新聞社編『大阪毎日新聞五十年』大阪毎日新聞社、1932年
奥村信太郎『新聞に終始して』文芸春秋新社、1948年
木下秀明『スポーツの近代日本史』杏林書院、1970年
木村毅『日本スポーツ文化史』ベースボール・マガジン社、1978年
黒田勇「20世紀初頭の電鉄事業とメディアスポーツ①」『関西大学社会学部紀要』第51巻1号、2019年
作間芳郎『関西の鉄道史』成山堂書店、2003年
鹿野正直『健康観に見る近代』朝日新聞社、2001年
『時事新報』復刻版、龍溪書舎、1882年
W. シュヴェルプシュ（加藤二郎訳）『鉄道旅行の歴史』法政大学出版局、1982年
瀬戸邦弘、杉山千鶴編『近代日本の身体表象：演じる身体・競う身体』森話社、2013年
高嶋航『帝国日本とスポーツ』塙書房、2012年
棚田真輔・青木積之介『阪神健脚大競走』いせだプロセス出版部、1988年
南海電気鉄道株式会社編『南海電気鉄道百年史』南海電気鉄道、1985年
浜田幸絵『〈東京オリンピック〉の誕生』吉川弘文館、2018年
J. ボイコフ（中島由華訳）『オリンピック秘史：百二十年の覇権と利権』早川書房、2018年
毎日新聞社一三〇年史刊行委員会『「毎日」の3世紀 新聞が見つめた激流 一三〇年（上巻）』毎日新聞社、2002年

- 松浪稔『身体の近代化：スポーツ史からみた国家・メディア・身体』叢文社、2010年
- 松浪稔「日本におけるメディア・スポーツ・イベントの形成過程に関する研究：1901（明治34）年 時事新報社主催「十二時間の長距離競走」に着目して」『スポーツ史研究』20、2007年
- 三上敦史「雑誌『中学世界』にみる独学情報」『愛知教育大学研究報告』58（教育科学編）、2009年
- 水野忠文『体育史概説——西洋・日本——』杏林書院、1994年
- 山本郁夫『陸上競技史（明治編）』道和書院、1970年
- 山本郁夫『近代陸上競技史（上巻）』道和書院、1974年
- 山本武利『近代日本の新聞読者層』法政大学出版会、1981年
- 油野利博「人見絹枝考」『鳥取大学教育学部研究報告 教育科学』第16巻第2号
- 吉見俊哉・白幡洋三ほか『運動界と日本近代』青弓社、1999年
- 渡辺勇一「明治期におけるスポーツジャーナリズムの一断面——官立山口高等学校長距離競走の報道に着目して——」『広島経済大学創立五十周年記念論文集』下巻、2017年
- 綿貫慶徳「〈研究ノート〉黎明期の新聞スポーツジャーナリズムに関する予備的考察：大阪毎日新聞に着目して」『上智大学体育』(44)、2011年
- 『戦後史大辞典 増補新版』三省堂、2005年

—2020.6.25受稿—